

〈特別寄稿〉

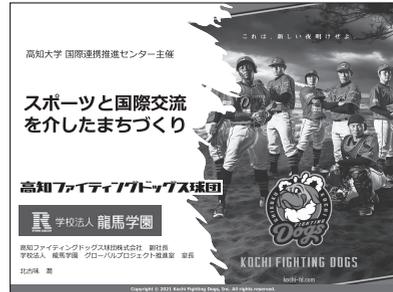
スポーツと国際交流を介したまちづくり

北古味 潤

はじめに

皆さん、こんにちは。よろしくお願
いします。

今日は、12時までということで、先生
とお話をさせていただいたときに、お
話をするボリュームで考えると大体8
時間ぐらいかかるのですが、それを今
日は1時間少しでやりたいと思います。



自己紹介

紹介は、先ほど先生にさせていただきましたので飛ばして行きたいと思いま
す。皆さんは大学生ですが、僕が大学
を卒業するタイミングで自分の進路を
考えたときに、私の話になって申し訳
ないんですが、世界一周がやはり自分
の中で1番大きなターニングポイント
だったと思います。僕は先ほど先生か
らご紹介いただいたとおり、大学も体
育大学、中・高もバレーボールだけ、スポーツしかしてこなかった。スポー
ツ以外で何かやろうと思ったら、「何浮かれているんだ、日本一になるんだろ
う」など、日本のスポーツ界は、ある意味、スポーツ以外を許さないような
慣習がありました。そのため、自分からスポーツを取る、無くすということ
はどういうことかと言うと、自分が何者か分からなくなるということでした。
バレーボール一本だった自分が、いきなりキャリアに困ってしまうわけです
ね。これが大学生のときでした。

「世界一周」自分自身がこれからどのような道に進んで行くのか、これは
自分探しの旅だったのかなと今思えば言えます。このときには、やはり旅行
関係やアメリカで勉強していたようなトラベルキャリアなどもそうですが、



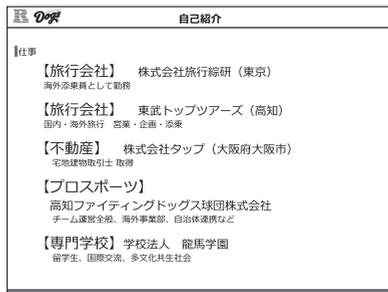
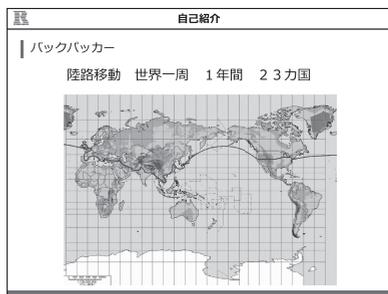
旅行会社で働きたいという意識はありました。しかし、では旅行会社で働くのに、就職活動をしなければならないのですが、多分、私自身が嫌だったのだと思います。10人ぐらい面接で並んで、「僕はこんなにすごいから、僕を雇ってください」というような自分を前面に出してアピールすること自体あまり好きではなかったです。

どちらかと言えば、旅行会社の人たちから、「北古味くんみたいな人を欲しいよ」と言われるような自分になっておかないといけないというマインドチェンジをしたのがこのタイミングでした。そのため、そのとき、バレーボールをなくしてしまっていた自分からすれば、何の取り柄もなかったのですね。英語が世界の共通語だと言われるような時代だったので、英語が喋れるようにならなければいけない。好きなものと言ったら、いろいろな海外の人たちとのコネクションも作っていきたいというので、旅行会社という道を選びました。

そこで、旅行会社で働くためには、自分にはいろいろな経験と知識が必要でした。陸路移動で世界一周、陸路で移動できない国もありますが、その国と大西洋は飛行機で飛んでいます。結局1年間ぐらいで、使ったお金は40万円ぐらいかな。食事代、移動費、宿泊いろいろなものをひっくるめて、すごく切り詰めた修行僧のような感じでしたね。四国八十八カ所ではないですが。それでも、バスも安いし、ヨーロッパを過ぎた中東辺りに行けば、1泊100円、200円で泊まれますので、そのように世界一周をして帰ってきました。

1番の収穫は、英語は世界の共通語ではなかったということです。おそらくフランスに行っても、英語での会話は難しいと思います。何か困って警察に行ったときなどは共通言語として英語はあると思うのですが、普通のコミュニケーションで1番必要だったのは、実は英語ではなかったという衝撃的なことを1年間経験しました。

この後、自分の興味関心といったものは、いろいろ増えました。僕の目標



は、20代のときに自分が興味があることを追求するということでした。そして、企業から選ばれる、日本の会社から選ばれるような自分になるための投資だというイメージで、旅行会社の場合には、海外添乗員として年間300日ぐらいつと海外、中東やエジプトなどに行っていました。危険値が高いところは独身の男性、僕などもってこいだったんですね。そして、不動産というのは、国家資格を取得し、まちづくりを勉強しました。「どうやったら、この街の、この地価、土地の価格が上がるんだろう」、「再開発ってどういうことなんだろう」、「日本の法律はどうなっているんだろう」ということを勉強し、20代最後ぐらいには、宅地建物取引士を取るのに邁進していました。とにかく1年中ずっと動き回っていました。

そうこうしているときに、スポーツチーム高知ファイティングドッグスの話が舞い込んできます。僕は実は野球のルールは未だにあまりよく分かっていないんです。どちらかと言えば、あまり野球が好きではない方なので、こういったプロスポーツチームがなぜ高知に必要なのかということ、ずっと考えさせてもらい、今この仕事に就いているのですね。

リーグ紹介

多分みなさんも同じように野球にそこまで興味が無い人もいると思います。先ほど、紹介いただきましたとおり高知ファイティングドッグスは育成組織です。育成というのは何かというと、選手が日本のプロ野球で活躍できるように、選手としての人材育成をしましょう。そして、指導者、監督・コーチもこういう独立リーグで指導者として経験を積み、プロに行きましょう。2年前まで高知ファイティングドッグスの監督をしてきていた元巨人の駒田徳広さんは、来年から読売巨人軍の3軍監督になります。チームで活躍するトレーナーも現在もプロで活躍されています。球団職員、広報、マーチャ

リーグ紹介

西田アイランドリーグplus

- ◆人材育成
打者入野球チームの減少等から本格的に野球を行う選手を失った若者にチャレンジの場を提供し、地域球界出身の指導者・コーチが熱い指導を行う。同時に野球人としてだけでなく結果的に野球を諦めし人生を歩み始める選手たちのための人間教育も実践して行う。
- ◆野球界外はしめとするスポーツ界の裾野拡大
育成組織に選手への成長教育を行い、育成をめぐるチームの選手のレベルアップを図ると同時に、幼少期の子どものうち対象に野球をはじめとしたスポーツの楽しさを伝える。
- ◆地域の活性化と地域貢献
1. 地域の活性化に「地元のチーム」として応援して頂き、地場の「にぎわいづくり」に貢献する。
2. 野球教室の開催や地域のイベントやお祭り等への参加、ボランティア活動を通して、地域の種々に貢献する。
3. 野球というグローバルに人気スポーツだからこそ可能なイベント開催を通じ、国民への訪問者、経済効果に貢献する。

Copyright © 2018 Kochi Sports Base, Inc. All rights reserved.

高知ファイティングドッグスによるスポーツビジネス

【公式戦 開催開催 (チケット、物販、飲食収入)】

【収益構造】

- ◆ 球団収入
- ◆ チケット収入
- ◆ 協賛金
- ◆ その他収入

Copyright © 2018 Kochi Sports Base, Inc. All rights reserved.

ンダイジングをやっているようなスタッフなども球団職員としてプロに行く。いろいろな関わる人たちが、みんなこのチームで育成されて、トップを目指しましょう。そして、野球だけではなくてスポーツのいろいろな裾野を展開しましょうということが高知ファイティングドッグスです。

第一産業を元気に！

今回は野球の話ではないのですが、牛を飼っていた時代もありました。高知県は、第一次産業が非常に重要です。なぜプロ野球チームが第一次産業をやるのだということにも関わっています。これは、先ほど紹介いただきました、アフリカから来たばかりのサンホ・ラシナですが、18歳のラシナくんが大根を作っていました。なぜ球団が大根を作るのだということも、皆さん少し心に留めておいていただきたいと思います。僕たちが使っている畑は、耕作放棄地、後継者不足などで使わなくなった土地をスポーツチームが借りて、そこで農作物を作って、それを販売して球団経営に持って行くという大きな流れもあるのです。「こういう耕作放棄地がありますよ」ということをテレビ局等も介しながら普段第一次産業に関わらない人たちにも知っていただくための、スポーツチームはある意味広告宣伝ツールだなというイメージで使っています。



地域とのコミュニケーションを深めよう

さまざまな地域のイベントに野球選手として参加しています。これは左からブラジル、真ん中はドミニカ共和国、右側はスペインからの選手たちです。WBCと呼ばれる、世界野球の大会の代表選手を高知県の僕たちのチームに呼んできて、いろいろなイベントにも参加してもらおう、これは国際理解というメッセージでやらせてもらっています。



スポーツが中心にある豊かな生活の場を作ろう

学校の授業にも野球選手、もしくはトレーナーも体育の授業に参加します。これは小学校の先生で体育が苦手な先生がいますよね。そういう先生に代わって僕たちが体育の授業をやらせてもらっていたら、1年で小学生の体力測定が全国平均よりも伸び、素晴らしい効果だということになりました。しかし、これは教授法などではなく、子ども



の気持ち・テンションの問題ですね。測定のときに一緒に野球選手が横を走ると、最後の最後まで走りますよね。そういう少しエンターテイメント性も入れて、子どもたちがどうしたら楽しく追求するのか、もっとやりたいという気持ちになるのか、を僕たちが提供できるのかというのも、大きな課題

だと思っています。

新しく今年、高知県スポーツコミッションというスポーツの団体を立ち上げました。その団体でも、これからは学校現場にプロ野球選手や元アスリートの人たちも派遣をしていこうという事業を、新たに今年からやるつもりです。



小学館から『牛を飼う球団』書籍化

こういった第一次産業の活動や旅行業のようなものも出てくるのですが、野球の新聞記者で、高知ファイティングドッグスの記事をずっと書いてくれた方が、「この高知の球団って野球チームなんだけど、野球じゃないよね」というので、小学館から本を出してくれました。もう5、6年ぐらい前だと思います。今は、体育大学のスポーツマネジメントやスポーツビジネスといったジャンルで参考図書になっていますね。



現役引退後のセカンドキャリア

なぜ野球チームが第一次産業やるのだろう、高知ファイティングドッグスは少し変わった野球チームです。なぜ野球選手が第一次産業やるのかは、まさに人材育成なのです。もしプロ野球選手になれず、プロに行けなかった場合、彼らのセカンドキャリアをどうしますかという僕が大学のときにぶつかった壁ですね。まさにセカンドキャリアです。

そのため、実は野球選手は自分で意識せずに、地域貢献と思いながら野球チームのイベントに参加し、今、ラシナも生姜農家のお手伝いしています。野球選手は野球のことしか知らないのです。こういう第一次産業の実情を分かってもらってれば、自分が野球を辞めたときに、生姜農家が後継者不足で、「ここの土地や家全部あげるからお前やってくれ」というので、後継者が

いない人たちから土地を譲り受けるということがあります。セカンドキャリアを考えるととき経験をしていれば「ちょっとやろうかな」と検討することができます。同時に「儲かるんですよ、農家って」ということも伝えたい。そこで、今、2、3人ぐらいの選手がもう住んでいます。家族もつくって子どももできて、第一次産業に残っている選手がこの10年ぐらいでも、もう15人ぐらいになっています。このように、まちづくりにも彼らのセカンドキャリアにも役立ってくる。

事例：第1次産業

現役引退後 セカンドキャリア

高知・宮下、野球選手から生業農家へ「やりたいことが見つかった」

【高知・宮下野野子】文＝高田博史

農家は、主要（しよつめい）の入ったケースがうずたかく積み上げられている。種する生業農家やうぶ抜いたききに響く「カッ」といふよい響が響く。

土産物で生業を生産している野中政さんが言う。

「始めのうちは誰も誰も誰も、何もかもやり取りでやらないかん。儲けなんてない。どこまでガマンできるか、まあ宮下、強いのはあるから（笑）」

宮下野は高知で4年間の現役生活を終え、農家になる決心をした。そのまま高知に残り野中さんから農家の指導を受けている。

宮下野を支援し出した。自身の経験、韓国に引渡す名前を伝えている。野中博や野中社長から、農家になるべく勧められた。なかには就労職員として働く農家もある。



Copyright © 2023, Kooki Publishing Group, Inc. All rights reserved.

韓国の野球界の厳しい現状

高知ファイティングドッグスは、海外との交流というグローバルな話もあるので、野球を分からない人でも分かるように話をしていきたいなと思います。

韓国の野球界は、日本より結構厳しく誰でも野球ができるわけではありません。高校や中学校の野球部は、入団テストを受けないと選手になれないのです。

そのため、すごく熾烈な競争社会から野球選手になった子たちは、「学校の勉強はしなくていいよ、あなたはもう野球だけしとけばいいから、じゃないとプロ野球選手になれないよ」というのをやっちゃっている時代がありました。今は韓国の状況も少し変わってきています。ただそういうことは日本にもありますよね。皆さんの地元の高校でも、スポーツに力を入れ、スポーツしかさせていないような高校がありますか？

韓国のプロ野球チームは、10チームしかありません。毎年、プロに行ける人は100人ぐらいしかいないのです。それなのに、毎年輩出される高校卒業や大学卒業のプロ野球選手を目指す人たちはというと、1,000人ぐらいいるわけですよ。1,000人いる中で100人しかいけないのに、残りの900人はどうするのですか。プロになるために野球しかしてこなかった、勉強もしていないと

事例：韓国野球

■現状把握

韓国プロ野球の現状

- ・韓国プロ野球チーム数 10チーム
- ・高校野球 60校 *約3,000人
- ・大学野球 30校 *約1,200人
- ・プロ選手育成チーム *学業は度外視
- ・入団テストを受け、合格したもののみプレー可能
- ・社会人野球 なし
- ・新人ドラフト 約100名(高校8割、大学2割)
- ・若年層 失業率(日本:4%、韓国:10%)
- ・徴兵制がある *徴兵(18ヶ月〜36ヶ月)
- ・徴兵されれば退団、復帰事実上不可能
- ・年俵(日本:3,985万円、韓国:1,500万円 2019年)
- ・いじり問題(過去を清算しないと入団不可) *2020年新規

Copyright © 2023, Kooki Publishing Group, Inc. All rights reserved.

いう学生さんの受け皿はどのようになるのだろう。今、韓国でよくニュースで言われていますが、韓国の若年層の失業率、15歳から29歳ぐらいの人たちの完全失業率が非常に高いのですよね。少し改善されてきているらしいのですが、若年層の失業率は7%の世界なのです。日本は今、2%ぐらいかな。そのため、韓国で野球選手になれなかったときの彼らの行き先や就職先も厳しい。僕たちも高知ファイティングドッグスとして、この韓国の野球界と一緒にできることはないかなというのを、韓国の企業や野球関係者とずっとコミュニケーションをとっています。1人でもいいから、日本の独立リーグでプレーができるような韓国の選手を招聘しましょうということで、韓国で入団テストをやらせてもらったりしています。

DOG 事例：韓国野球

■事業の目的
 韓国企業とタイアップし
 プロを目指す選手の受け皿として
 1人でも多くのプロ選手の育成と輩出を目指す



Copyright © 2021 Kochi Fighting Doggs, Inc. All Rights Reserved.

DOG 事例：韓国野球

<主な成果>

(入団テスト)
 2016年10月 京畿道城南(ソナム)
 ・韓国初 日本野球入団テスト
 ・74名参加(元プロ24名)
 2018年2月 ソウル
 ・45名参加(元プロ15名)

(入団実績)
 2017年 契約選手2名、育成選手2名、アカデミー生2名
 2018年 契約選手2名、育成選手2名、アカデミー生2名
 2019年 契約選手2名、アカデミー生1名



Copyright © 2021 Kochi Fighting Doggs, Inc. All Rights Reserved.

DOG 事例：韓国野球

<主な成果>

1. 韓国語教室・卓球クラブ ガスボンサーへ



石井 大智
 投手
 高知ファイティングドッグス



Copyright © 2021 Kochi Fighting Doggs, Inc. All Rights Reserved.

韓国の野球界との交流

入団テストも2016年、2018年、それぞれ74人から45人、場所によっても少し違うのですが、こういった入団テストをすることによって、今まで契約選手やアカデミー育成契約などいろいろあるのですが、多くの韓国人から高知県に来る選手が増えてきたというのが今までの流れです。

DOG 事例：韓国野球

<主な成果>

2. 姉妹都市交流
 高知県 友好交流都市 全羅南道
 高知市 姉妹都市 木浦市
 → 高知ファイティングドッグス 独自キャンプ実現



コロナ後 韓国から 少年野球チーム 高知訪問 を企画中

Copyright © 2021 Kochi Fighting Doggs, Inc. All Rights Reserved.

2016年にメールが来ました。「軍隊に行っている」という方からです。韓国は徴兵制度ありますからね。徴兵制で「僕はプロ野球選手から軍隊に行きました」ということは、もうプロ野球選手ではなくなるのです。2年間軍隊に行くと、もう野球の感覚がなくなります。彼らはプロ野球には戻れないのです。しかし、その彼からのメールには、「こういう機会を、日本に行けるかもしれない機会をつくってくれてありがとうございます」とありました。「今の自分は、兵隊さんだから入団テストを受けることができないのだけど、2年間の徴兵が終わったら絶対にチャレンジしたい」、「まだまだ野球を諦めたくない」とのことでした。これからコロナ禍が過ぎた後ですが、今、僕がグローバルプロジェクト推進室で関わっている龍馬学園は日本語学科があります。そこで、これからは、韓国とタイアップしてプロ野球選手を目指すのだけど、同時に日本語教育も入れて、日本でもプロ野球選手が無理だった、高知ファイティングドッグスの選手も無理だった。そんな時でも、日本で就職できるように日本語教育も一緒に提供しようと考えています。

常にセカンドキャリアのことは考えていきたい。プロ野球選手にたとえなっても、多分2、3年で戦力外になっている人たちは多いと思います。50歳まで働ける人は、ほほいません。このような世界に行けば、プロ野球選手になるというのは、リスクなことですので、常にやはりセカンドキャリアを考えていきたい。

高知県には友好都市として全羅南道があります。そして、高知市の姉妹都市にも木浦市があります。僕たちも韓国と何かをするのであれば、高知県や高知市の友好交流都市との交流をやりましょうとのことで（お願いもされていないのですが）韓国に乗り込んで、木浦市に行って、「木浦キャンプをやるので一緒にやりましょうよ」とお願い

をしました。すると、自治体も宿泊施設を半額にしてくれたり、バスを無料で提供してくれたり、いろいろな食事会、歓迎会を韓国側はやってくれましたね。僕たちは移動する費用、そして日々の食事代を負担しました。ラシナも韓国に行きましたね。きつかったですね、僕が安く行こうとみんな船で行ったので。九州までバスで行ってそこから船に乗って、またバスでな



ど大変な道のりだったと思いますが、このように姉妹都市との交流をすることによって、僕たちも向こうへ行けば、現地で韓国の野球チームの子たちとの交流をし、高知県とつながりがあるような団体さん、個人の方々との交流ということをつなげていきます。

中国の野球界との交流

中国の野球はまだまだだといいます。そんなに有名ではないですね。メジャースポーツではない。しかし、中国にもMLBがあるのですが、これは、アメリカの野球機構のメジャーリーグです。アメリカが中国にアカデミーを3カ所ぐらい作っています。中国全土からポテンシャルがありそうな選手をピックアップしてきて、メジャーリーグがお金を出して学校教育、そして英語の教育、野球の教育を無償で提供します。中国の人材、ものすごい人がいきなり出たりするのですよね。僕が行ったときにも、ずば抜けた能力がある子が内モンゴルから来ていました。

高知ファイティングドッグスは、中国代表の許桂源と契約を結びました。彼自身はアメリカでもプレーをしていました。ただ、アメリカでは戦力外になってしまった選手で、どこかプレーするところを探していたという現状もあります。中国の代表選手が日本の僕たちと一緒に交流をする、選手であるということで中国全土やアメリカでも「許桂源選手が高知ファイティングドッグスに入団したよ」というニュースがきちんと流れる。これも、2018年



DOG 事例：中国野球
<主な成果>
中国選手との契約

許桂源
Xu Guiyuan
(きよ けいげん)

MLB 2015年
ボシチモア・オリオールズ

中国 2017年 WBC 中国代表



Copyright © 2021 Seichi Publishing/Seiji, Inc. All rights reserved.

DOG 事例：中国野球
2018年 高知ファイティングドッグス入団

Whole new ball game for 'Itchy'



Copyright © 2021 Seichi Publishing/Seiji, Inc. All rights reserved.

の後にコロナ云々ということがあったので、次にどのように野球交流で、高知県と中国を結ぼうかというのも次のステップです。

中南米との交流

そして、中南米。中国も台湾もそうです。韓国もそうなのですが、この中南米は特にJICA、国際協力機構がある。JICAや高知県議員の皆さんから「中南米訪問していたら、なんか野球してるんだけど、なんかできんかなあ」と言う。結局僕はそのお話を聞き、3ヵ月後には、もう南米に飛行機で飛んでいました。議員さんにいくら説明を聞いても行かないと分からないと思いました。いろいろな取り組みをしたのですが、

去年は、テレビ局も一緒に行ってくれました。この取り組みが非常に面白い。面白いと言いますか、意味があることなのですよ。



中南米の日系人

中南米に日系人がいるのです。これをご存知だった方？ あまり知らないでしょうか。テレビ局が1時間特別番組を作ってくれたので、冒頭だけ2分ぐらい見ていただきたいなと思っています。

(テレビ視聴)

僕も1番最初、2018年まで知らなかったのです。日本の戦後、敗戦した後に世界中にいた日本兵がみんな日本に帰ってきました。どうなるかといえば、鉄もない、食べ物もない。戦後の敗戦の日本に、いろいろな国から日本へ帰ってきたら、それは田舎もパンクしますよね。仕事もない。そういうときに日本の政府が何をしたかということ、移民政策です。「中南米へ行ったら、金のなる木があるぞ!」とポスターまで作って移民を促進させたという時代があります。(現地移民された方談)しかし、そうでもしないと、その時代はみんな生きていけなかったかもしれない。僕もその時代にいなかったのだから分かりませんが。先ほどの現地の方が言うように「日本を捨ててきた」、「新たな夢と希望を中南米に求めた」という時代があります。その中でもやはり高知県は、非常に貧しかったと思う。

そういった人たちが、アメリカにもドミニカ共和国にも、中南米の中でもいろいろな地域にいる。そういう日本人、そしてその人たちの次の世代、2世3世で日系社会が今できています。ブラジルには日系人が非常に多いです。

中南米でのコミュニケーションツールとしての野球

そうした中で、1番最初、昭和時代に移られた人たちが移った日本人とのコミュニティで必要だったのが、コミュニケーションツールとしてのスポーツだったのです。それが、その当時の日本で流行っていた野球です。中南米は、アルゼンチンもボリビアもパラグアイ、ブラジルいたるところで野球というスポーツをやっているのですが、大体日系人が多いです。

ブラジルは日系人の歴史が長いので、今、多分3世や4世の時代です。そうになると、日本語は喋れないのです。渡辺哲朗（わたなべてつろう）くんというブラジル人の友達がありますが、日本語が喋れません。

パラグアイは、日系人のコミュニティがあるので、みんな2世3世でも日本語を普通に喋っています。先ほどのVTRは、テレビ高知のページにYouTubeがあります。ネットで「テレビ高知・パラグアイ」で調べると、1時間番組が見られます。そういうところでも野球をしている人たちの指導者の育成をしようとしています。移住した人たちは、昭和時代のスポーツの指導方法が受け伝わっています。アップデートされていないので、僕たちがブラジル、パラグアイ、アルゼンチンの人たちの指導者の育成をJICAさんとしてようと始めています。

Dege 事例：JICA南米指導者研修

■事業のねらい・概要

移民政策によって中南米に移住した移民とのスポーツを通じた交流。
JICA（国際協力機構）との連携によって、現地の野球指導者を育成する。



国際協力機構 JICA
独立行政法人 国際協力機構

Copyright © 2021 Kinki Publishing Group, Inc. All rights reserved.

Dege 事例：JICA南米指導者研修

■研修受け入れ実績

2018年 ブラジル3名、パラグアイ2名、アルゼンチン1名
2019年 ブラジル3名、パラグアイ2名、アルゼンチン1名
(オンライン実施)
2020年 ブラジル3名、パラグアイ2名、ボリビア1名



Copyright © 2021 Kinki Publishing Group, Inc. All rights reserved.



高知県と中南米をつなぐスポーツイベント

夢と希望をとということで、ブラジルの選手を何とか見つけようということで入団テストをしたり、僕が行った2018年から「これは必要だ」、「日系社会と今の僕たち日本人の結びつきをなくしちゃいけない」という単なる僕の思いもありますが、野球教室をしにパラグアイで4都市にブラジルで6都市に行ったりしました。これは全部自腹で、自分たちで行きました。僕は元旅行会社なので、高知発のブラジル行き往復、片道40時間。アメリカで乗り継いで、2カ所ぐらい乗り継いで行くのですが、いくらで行ったと思いますか？ 往復8万円でした。探すプロなので、こういう安い航空券を使いながら、僕たちは中南米にも行かせていただきました。現地に行ったら皆さんケアしてくれるので、現地の野球連盟と一緒に野球教室をどんどんしていきました。

ここに写ってるのは、石井大智という高知ファイティングドッグスの選手なのですが、この選手は去年のドラフト会議で阪神タイガースに本指名されました。今、阪神1軍でも投げています。高知ファイティングドッグスに入ってきたときは全く無名でした。秋田高専出身で独立リーグからのプロ



は、珍しいです。なぜ僕は彼を連れていったかということ、きちんと理論・理屈で物事を考えられるし、自分に足りないものが何かということも分析ができる。彼にもっと必要だと思うのは、日本しかしないので、グローバルな視点ですね。ものすごく恵まれているようないい写真に見えますが、ボールがほとんどないのです。ぼろぼろのボールを使っていたり、グローブも試供品をもらったりしますが、こういう環境があまり整っていないブラジルでも、「みんなこんなに生き生き野球してるんだよ」というのを、彼に見せたかったというのがありますね。

これも日系のブラジル人、これがジョナタン。ラシィナより少し上の日系人のジョナタンやこのジョナタンの右側にいるのは日系アメリカ人です。アメリカのザック・コルビー、2人とも日本語は喋れないのですが、みんな日系人なのです。その横の高知工科大学の野球部の子たちも一緒に連れて今までブラジル、パラグアイに行きました。



スポンサー企業の南米進出

こういうことを中南米でやっているとな何が起るかというと、高知ファイティングドッグスのスポンサーは、大体300社から400社ぐらいがサポートをしてくれています。そういう企業の中に、海外に出てみたいという興味を持った企業さんはいます。僕たちスポーツというコンテンツは、在外公館のみなさんにも非常に喜んでいただけます。大使館・領事館だけでなく、各国日本人会、高知県人会、野球連盟など。



普通民間企業が行っても、商売とみられたりしてそこまでの受け入れはないかもしれません。ただ、スポーツ国際交流というコンテンツは、現地の方も政府機関も本当にウェルカムをしていただける。そこで、僕たちのこういう活動を通じながら、南米でも現地の人たちの生活の質の向上やビジネスなども展開させたいという企業さんが、一緒に僕たちと行けばいろいろな人脈もできますし、みんな好意的に受け止めてくれているので、次のステップにつながります。次のステップまでまだ作戦を練っています。

アフリカの少年を受け入れよう

次にアフリカです。ラシナくんの自己紹介をどうぞ。

ラシナ選手：こんにちは。高知ファイティングドッグスの背番号34番、サンホ・ラシナです。アフリカから来ました。高知7年になります。日本語は喋れるんですけど、読み書きができなくて、今、龍馬学園でちょっと勉強させてもらっています。よろしくお願いします。



北古味：1番最初、15歳のとき来て、今何歳だっけ。

ラシナ選手：今月で24です。

北古味：ラシナが今24歳、ラシナが来たときは15歳。どういう状況で、ラシナはなぜ野球をしてて、なぜこの高知に来たのかっていうのを、ちょっと思い出しながら皆さんに説明できますか？

ラシナ選手：1番最初は2008年、JICAの青年海外協力隊の日本人の方が僕の国に来て、その人と出会って野球を教えてくださいました。2013年その青年海外協力隊の日本人の方が高知ファイティングドッグスとつながりがあって、僕がテスト受けて来ました、高知に。

北古味：すごく端折りましたが。野球を始めたのは何歳のときですか。

ラシナ選手：11歳ですね。

北古味：11歳で始めて、15歳のときには高知県に来ました。その間は、ずっとそのJICAの人と野球をしていましたか？

ラシィナ選手：はい、自分の国でやってみました。

北古味：なぜ、野球なんですか。サッカーですよね。ブルキナファソ、アフリカっていえば。

ラシィナ選手：野球と出合うまでは、ずっとサッカーで、最初はそのJICAの日本人の方が住んでたところが、僕の家のおすぐ近くだったので、なんか面白そうだなと思って遊びに行ったら、野球を教えてもらったんです。

北古味：ちょっと珍しい日本人来たぞと。日本人何しに来たんだって行ったら、野球をやったので、野球を始めた。

ラシィナ選手：そうです。

北古味：でも、1年・2年してたら、なぜプロ野球選手という目標が出てきましたか。

ラシィナ選手：野球を続けたかったので、あと野球が自分の国ではあんまり有名なスポーツではないので、できるだけ子どもたちに、野球というスポーツを知ってもらいたいというか、野球を自分の手で自分の力で広めたいというのが夢だったので。

北古味：プロ野球選手になって。

ラシィナ選手：そうそう。

北古味：高知ファイティングドッグス側の受け手の僕からしたら、ブルキナファソで活動していた方からメールが来ました。ブルキナファソで（そのときに送ってもらったのがこういう写真）気付きますよね、靴は履かないんです。けど、靴がないわけじゃないですよ。

ラシィナ選手：そうです、靴はありますけど、動き出すときは靴を脱ぎます。そっちの方がベストパフォーマンスが出せるので。



北古味：小石もいっぱいあるので、痛いかなと思うのですが、痛くないですよ。

ラシィナ選手：痛くないです。

北古味：こういう写真とともに、なぜアフリカで彼らは野球をしてるんだろうと、僕らまた疑問がどんどんどんどん深まりますねえ。このときに、やはり、彼らの職業としてのプロスポーツ選手という新たな職業を生み出すということも、大きなテーマです。

ブルキナファソの平均年収、そのときの調べでいくと平均年収は6万円、なので月5,000円の収入しかありません。これで、高校出ました、大学出ました。仕事もそんなにいっぱいあるわけでもない。同じように、どういうふうにして僕たちはこれから生きていくんだろうっていうのも、住んでる人はそんなに不安じゃないんですかね。なんとかなるだろうと思ってる。

ラシィナ選手：そうですね、はい。別に死ぬわけじゃないので、何とかなる。

北古味：分かりました。強いですよ。野球が来ました。プロサッカー選手というのは出てますよね、ブルキナファソからも。プロスポーツ選手という中に、野球というコンテンツ、ジャンルがあってもいいんじゃないかっていうのが、僕の一つの考え方でした。もっと言ったら、僕らからしてもすごいですよね、やっぱり。フィジカル的な魅力、ブラジルもそうですし、今、インドとかスリランカもそうだし、スポーツの競技がそこまで入ってない、指導が入ってないところでも、彼らの身体能力が、どういうふう発揮されるのかっていうのは、すごくやっぱりスポーツチームとかアスリートを育成する僕たちからしたら、すごいマーケットっていったら失礼ですけど。でもアフリカは新たなマーケットだと思っています。なので、アメリカのメジャーリーグもアフリカに作ったよね。なんかアカデミーみたいなものを。

ラシィナ選手：南アフリカに。

北古味：南アフリカにね。

ラシィナ選手：あと、ウガンダ。

北古味：ウガンダ。

ラシィナ選手：ウガンダはまだできてないですけど、作る予定みたいです。

北古味：というふうに、やはり世界中のこういうアスリートを育成しようと

する人たちは、そういうマーケット感覚でもやっぱりアフリカというのを見ます。

こういった中で、僕がやっぱり必要だと思ったのは、彼らがもう必死にやってるし、目も輝いてるし、自分の夢だっていうものを、高知ファイティングドッグスの日本人の選手に見せたかったのが、もう一つの目的です。

こんなに恵まれてるけど、なんかこうちょっとどうでもいいようなことで野球を辞めちゃったりとか、諦めたりとか、こんなに恵まれてるのになんで努力しないんだろうっていったところも、やっぱりちょっと僕の中でも納得がいかない部分もあったので。こういう15歳の子が必死になって人生かけて、ブルキナファソ代表で来たっていう子と一緒にやれば、相乗効果でいいことになるんじゃないかなっていうのも、すごい期待感がありました。

ラシナくん、「ラシナ行け」っていう感じで来たわけではないんです。入団テストというのがアフリカでありまして、何人ぐらい受けましたか、そのとき。

ラシナ選手：70人ぐらいでした。

北古味：アフリカから野球してる子たちが集まってきて。

ラシナ選手：はい、そうです。

北古味：その中での入団テストで、ラシナが選ばれたと、15歳で。

ラシナ選手：はい、そうです。

北古味：選ばれたところまではいいんですけど、じゃ僕たち受け入れる側としては何が必要かっていったら、お金が要ります。なので、このときに、2014年ですね、多分2013年ぐらいからやり取りしていたんですけど、クラウドファンディングもやりました。8年前のとき

「日本でプロ野球選手になる！アフリカ少年の夢を叶えたい！」
高知ファイティングドッグス後援

目標金額 1,147,000円 目標達成率 100.00%

達成率 74人 2014年6月15日

プロ野球選手を目指したい！

Copyright © 2014 Earth Impact, Inc. All rights reserved.

もう一人、夢を叶えるため、募じた日本プロ野球人

日本人のプロ野球選手の夢を叶え「ジャズル隊長の父」と呼ばれた高知県出身の志保野 (自由学～特待生) の子孫、金野少年野球チーム(父)創。高知県にはまだプロ野球入団前に国際選手を輩出して、プロ野球選手を目指す青少年に、チャンスをもてるのがないか、と経験を分け、彼もまたプロ野球選手を目指し、夢の練習生としてチームに参画しました。

プロリーグない国境では誰から知訳のチームで練習を勧、全国のチャンスに「先陣にやかり、本塁打を打って」で金野少年野球、金野少年野球の夢を叶えたい。

写真：「日本プロ野球の少年」として、同国チームに参画しないプレイヤーもたい！プロ野球選手志望の志保野

Copyright © 2014 Earth Impact, Inc. All rights reserved.

に、100万円ぐらいの費用をいただきながら、アフリカのラシナと。先ほどちょっと成長したジョナタンっていうのを見てもらったと思いますけど。ブラジル、日系ブラジルのジョナタン、この2人を高知ファイティングドッグスのアカデミー生として受け入れましようっていうプロジェクトが始まりました。

ラシナ早かったですね、地域に溶け込むのが。このときには、日本語全くといっていいほど喋れなかったですね。

ラシナ選手：はい、全く分からなかったです。

北古味：母国語は。自分の国の言葉は。フランス語ね。

ラシナ選手：フランス語です。

北古味：僕も英語しかできないので。最初ラシナを迎えに行ったときには、会話が成立しないですね。僕英語、でも彼フランス語だし、日本語も喋れないし。あのとき、でも会話してたよね、僕たち。

ラシナ選手：してなかった。

北古味：いや、本当に今考えたら怖いですよ、だって1人で来てるのでもん。1人で来て僕も迎えに行って、「初めまして」っていうこの15歳の子をうちらで預かるっていったときに、これどうするのと、親は大丈夫なの。なんかこれ、ちょっとまずいこと起こってるんじゃないのっていう感覚だったんですけど、彼の場合には、彼のチャレンジを応援しに駐日ブルキナファソ大使まで来ました、高知県に。

高知県知事にも表敬訪問いただいて、僕は15歳で野球選手を育てる。勉強もせずこれ大丈夫なのかなっていうのも、すごい疑問がたくさんあったんですけど、やはりそのときの、大使と話をしてて、その当時ウビダ大使が言われた言葉は、「ブルキナ



ファソだけにいても例えば、借金して高校出ても大学出ても、いい仕事に就くことは難しい。なので、彼が若いときに、新たなことにチャレンジをして、母国の子どもたちに夢と希望を提供してもらえることが、非常にありがたい」というお話をいただいたっていうこ

とがあつて、僕たちも、まずいことをしてるんじゃないという感覚ではなくなりましたね。絶対にプロ野球選手にすると。高知ファイティングドッグスの選手でも、最低のお給料は10万円が月にもらえます。住むところは提供されているので、必要最低限生きていくことはできる。でも、ブルキナファソの月に5,000円に比べれば、ラシィナは、高知ファイティングドッグスの選手になるだけでも、毎月例えば、1万円でも2万円でも自分の母国に送金ができれば、立派な、長男だったよね。何人兄弟。

ラシィナ選手：12人です。

北古味：12人兄弟の長男が一家を支えることもできている。

彼自身が15歳で来て、そりゃ1発で合格するわけないですよ。残念ながら。アフリカの石ばかりのグラウンドで裸足で走ってる子が、高知に来て入団テストを受けて、韓国やアメリカやブラジルでやってる他の選手と比べられて合格するわけないですよ。1回目はさすがに不合格でした。

でも2年間という期間、彼は頑張つて、これ本気で何の付度もなしに、本当に合格しました。合格っていうのは、何かっていうと、高知ファイティングドッグスには選手枠があります。25人という。ラシィナが合格するということは、誰か1人の日本人もしくはアメリカ人の選手が契約を切られるということ。彼らを超えなきゃいけない。ただ、彼の場合には、練習前にも練習後にも、グラウンドの準備であったり、日本語がわからない中でも必死に先輩にもついて行って頑張つたっていったこともあつて、監督、コーチも彼のポテンシャルの部分とか大いに評価をし、契約をしました。



1番最初の試合というのは、何歳のときでしたか？

ラシィナ選手：公式戦に出られたのは、藤川球児さんのときですね。2015年ですね。

北古味：2015年に初めて試合出たっていうのは、皆さん知ってる藤川球児が、高知ファイティングドッグスに来ましたけど。凱旋の初めての登板するぞっていったときに、ラシィナが、内野手で初めての公式戦出ましたね。あれ覚えてますか。

ラシィナ選手：覚えてます。普段は球場500人ぐらいしか入ってないのに、その日は3,000人ぐらい入ってました。

北古味：3,000人ぐらい来てくれたね。

ラシィナ選手：いきなり先発だったので、もう緊張で吐きそうでした。

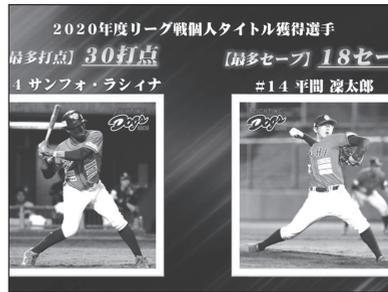
北古味：2015年から彼は、もちろん底辺の底辺から始めるんですけど、それからやっぱり5年間、頑張ってきて、昨年フル出場しましたね。ほとんどの公式戦に出るぐらいまで上達してきました。四国アイランドリーグで打点王になった。こういうタイトルを取るまでになったりとか、「恐怖のアフリカ人」みたいな感じの表現されてましたね。

ラシィナ選手：そのときは、9番だったので。

北古味：恐怖の9番か、9番打者なのに打点王って、これちょっと野球界では「そんなんあるの」って言われるぐらい、それぐらいの選手に成長して、2021年今年は初めてキャプテンにもなりました。

少し今までを振り返ってみてどうでしょう。今、大学生とかに自分の今までの、この8年間を振り返ってみて今思うことはどういうことがありますか、みなさんに。

ラシィナ選手：今思うこと、最初来たころは、「日本へ行くぞ」と言われて自分の頭の中は、イメージしてきたのは、大阪とか東京とかイメージしてきたんですけど、来てみたら高知でした。市内に住むかなと思ったら、佐川まで、めっちゃ田舎の方に連れてこられたので。で



も、今考えたら、高知の方がよかったかなと思っています。本当に。ここまでやってきたのは、普通だったら1年とか2年で首になるんですけど、やっぱり、高知の人たちに応援してもらって、毎年毎年。最初のころから、試合も出てないときから、もう選手たちの中で1番ファンが多かったです。試合出てないのに。

やっぱり、みんなに応援してもらってるのがすごく、多分どこ行ってもそういう機会がないので、多分、今プロ行っても今みたいに応援してもらうことは、多分ないと思います。高知の人たちがすごく応援してくれてるので、それはすごくありがたいです。

北古味：素晴らしい話、ありがとうございます。こういうアフリカからのチャレンジっていったものは、アフリカの人たち、友達とかブルキナファソはどういうふうに見てると思いますか。どういうこと感じてるのかとか。

ラシナ選手：みんなは、やっぱりチャンスがあれば、日本へプレーしにきたいですね。

北古味：プロ野球選手になりたいと。

ラシナ選手：そうですね、はい。

北古味：野球連盟とかありますよね、ブルキナファソとか、そういった人たちはどういう反応してますか。

ラシナ選手：いつものプレーを自分がやってること、取ったタイトルとか1日のいいこととか、試合の結果とかいつも聞いてくれるので、なんかちょっとだけでもみんなのモチベーションを上げるために、なんかいいことあったら、それを取り上げて、みんなが「僕もラシナみたいになりたいよ」というシチュエーションをできるだけ作ってもらったりしてます。

北古味：いいですね、2ヵ月ぐらい前に外務省の報道担当から連絡がきて、「ラシナのチャレンジと今のこの活躍を、ブルキナファソ国営放送で特別番組を流しますので写真とか動画をください」という内容でした。

<p>Dog 事例：アフリカ</p> <p style="text-align: center;"><主な成果></p> <ul style="list-style-type: none">・ JICA国際協力機構とのタッグが始まった （パラオ野球教室、パラグアイ野球教室、中南米野球指導者研修など）・ テレビ局の 海外取材 2回（アフリカ、パラグアイ） <div style="text-align: center;"><p>© 2015 RKC Broadcasting Station, Inc. All Rights Reserved.</p></div>

ラシィナが、15歳のときからチャレンジし、どういうことが起こるかっていうと、アフリカの西アフリカの代表チーム、ガーナ、コートジボワールとかの選手で、選抜チームが高知県に合宿に来たりとか、これJICAとかいろんな企業さんのスポンサーでね、ラシィナがいるからっていうので来てくれて合宿をしたりとか、あとはどういうことがあったかなあ。アフリカのオリンピックのアフリカ予選出ましたよね。

ラシィナ選手：はい、出ました。

北古味：ラシィナがエースで。あれ結果はどうでしたか。

ラシィナ選手：結果は、1次予選と2次予選があって、1次予選は1位になりました。優勝して、2次予選行って負けました。3位でした。

北古味：アフリカ全土で3位になったと。

ラシィナ選手：はい。

北古味：それは2020東京ですよ。その前のオリンピックの予選は。

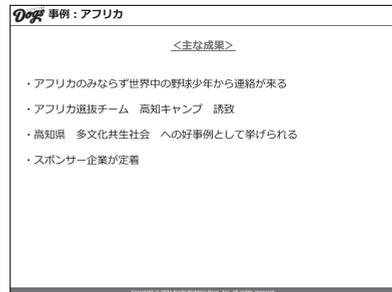
ラシィナ選手：出てないです。多分出たことないですね。

北古味：そう、多分僕たちも野球の普及を考えたときに、今までオリンピック予選とかにも出ることもなかったような国から、ラシィナがこういうふう

に8年間やるだけで、オリンピックに出場するチームが編成されて、ラシィナの周りの人たちもモチベーションをずっとキープしながら野球の技術力を上げてきて、アフリカ全土で3位になるっていうのは、もう僕はすごい評価だなと思います。ぜひ、次はアフリカ代表としてブルキナファソの代表選手、アフリカ代表としてラシィナが次のオリンピック、次オリンピックなかったか野球。フランスなかったね、パリ。

ラシィナ選手：そうですね。

北古味：そういうふうな、国としてでも野球界としてでも、ラシィナの活躍ということは、もうちょっと評価されてもいいのかなというふうに思ってます。



2017年に大阪体育大学から、インターンシップに来てた学生さんがいます。彩（サヤカ）ちゃん、大阪体育大学とは結構提携してるので、毎年5人から10人ぐらい来ます。年間でも高知ファイティングドッグスは、全国の学生さんのインターンシップで40人から50人ぐらいを毎年受け入れてます、時期は違いますけど。

その中の1人の彼女は、やっぱりラシナとの出会いもあって、JICA隊員として彼女は旅立ちました。でも、コロナになってすぐ帰ってきちゃってね。

諦めずに、こうアフリカとのパイプを作るっていう生きざま、彼の存在自体で影響されるのは、母国の人たちだけじゃなくて、高知県のおじいちゃん、おばあちゃんとかもそうです。「僕らも昔貧しかったんや」とかっていう人たちは、「あのときは夢と希望

もなかったな」って、多分戦後の日本とかを知ってる年配の方々は、ラシナのチャレンジを、本当に心から応援してくれますし、若い子たちもラシナの存在で、アフリカに興味を持ちました。自分の何かをしようとする選択肢にアフリカが入ってきましたっていうことでも、日本人にとってもすごくいい影響を、彼は与えてくれます。何かみなさんに、最後メッセージありますか。

ラシナ選手：野球を最初始めたころに、本当に自分が日本で野球するとは思ってなかったので、ただの遊びだと思ってやってたらここまで来たので、目の前に転がったチャンスを拾ったというがあるので、みんなもやりたいことを、目の前にあったチャンスをぜひつかんで頑張ってください。



北古味：ありがとうございます。みんなと握手しながら席に戻って下さい。その間、僕はしゃべってます。時間ももったいないので。あと7時間ぐらいいいきたいんですけどね。

高知ファイティングドッグスが地域（社会）にもたらす効果

こういったいろいろな国とのつながりというもの、あと僕がやっていきたいのは、高知県に外国人の人たちに来てもらいたい。短期でもいい。アフリカからも実際に来ました。韓国も来ました。台湾も来た。中国は、まだ団体ではないです。しかし、なぜそういうことをしていくのかというと、最終的に僕はこういうスポーツチームにあるのは、経済的な効果の側面と、社会的な側面が必ずあると思っています。なかなか社会的効果といったところは、評価がしにくい。



「まちづくり」とはなんですかという話なんです。コミュニティができました。コミュニティできたからなんですかという話にもなってきますし、皆さんにエビデンスとして提供していくのに、社会的効果というものは、今後どのように僕たちも表現したらいいのかなとずっと考えています。それが、ラシナのような、生きた遺産、こういう彼のような存在自体が、一つの社会的効果でも僕はあると思う。

高知ファイティングドッグスが地域（社会）にもたらす効果

高知ファイティングドッグス 社会

経済的効果
Business impact

- スポーツビジネス
- 観光消費
- スポーツ関連産業創出

社会的効果
Social impact

- 地域コミュニティ形成
- 地域アイデンティティ醸成
- 情報発信・シティプロモーション
- 人材育成
- まちづくり

Copyright © 2019 Kochi Fighting Dogs, Inc. All rights reserved.

高知ファイティングドッグス紹介

“自国を築き上げる地域へ”
人々、文化、地域と地域をつなぐ → 既存のものを結びつけるイノベーション
他立リーグだからできること、野球だからこそできることを実現しつつ、野球・スポーツ・ビジネスの枠を超える

高知ファイティングドッグスは 何者だ？

“社会（地域）課題解決の起爆剤”

- **四国／高知の地域課題解決**
地域コミュニティ形成／地域アイデンティティ再構築／人材育成とまちづくり等
- **四国／高知にビジネスを**
スポーツビジネスの確立：銀行とスポンサーシップ／投資対象としての価値向上等
- **四国／高知を全世界へPR**
シティプロモーション：北米遠征／各国トライアウト／研修を通じた海外事業等
- **四国／高知に交通人口を**
海外からの誘致（JICA関係）／アカデミー／インターン受入／企業マッチング等

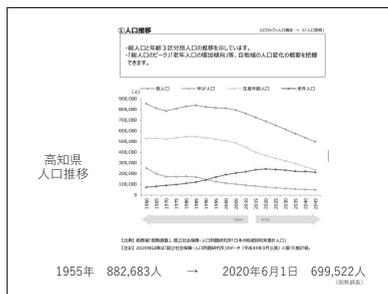
Copyright © 2019 Kochi Fighting Dogs, Inc. All rights reserved.

社会（地域）課題解決の起爆剤

「まちづくり」を考えていく場合、僕はスポーツチーム職員全員で1番最初に考えついたのは、社会に住んでいる僕たちが高知県の地域の課題を、このスポーツチームで、スポーツというコンテンツ、もしくは野球というコンテンツで、何か課題を解決するような起爆剤にならないかということを常に考えています。

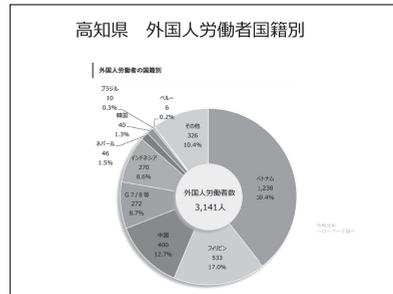
後継者不足のときには、イベントを通じて選手のセカンドキャリアにつなげていく、これから起こっていくことですね。これは、高知県の人口推移です。皆さんも出身の地域を一度見てみてください。日本は、人口減少がもう歯止めがききません。高知県自体ももう70万人を切りました。高知県の人口がどんどん減っている中で、「じゃ、僕たちは『まちづくり』として何をすべきいけないのか」といったときに、僕は一つ、こういったスポーツの交流で、高知県を夢が溢れる地域にしていきたい。先ほどのラシナも、なんとパーフェクトな回答してくれたんだろう。

「高知じゃなかったら、僕はできなかつたかもしれない」、「高知の人にこんなによくしてもらって」という言葉どおり、これからラシナもプロ野球選手を目指したり、今やってることを諦めなければいけない年齢になってきたりします。少なくとも5年から10年ぐらいの間で彼の人生は、変わってくると思います。そのときに、彼は、聞いてもらったような日本語力で、今読み書きの勉強もしています。こういった中で、セカンドキャリアとしてでも、こういう人口減少が起きているような日本の都市に、ラシナのような外国人の人たちが、雇用されて働いてくれないか。もしくは生姜農家の後継者をしてくれないか、先ほどの選手も、「今、イノシシ捕っています」とイノシシの鳥獣対策をしている選手もいます。こういった外国人の人たちに支えられるような高知県になっていく構



図にもなると思います。

例えば、ラシナが高知県に住んで高知で働いてくれたしたら、アフリカと結んで何かをしようと思ったときには、ラシナがすごくいいでしょうね。フランス語もできるので、フランスと何かをできるかもしれない。彼が一つのグローバルのきっかけになる。「じゃ、アフリカはラシナ」、「インドだったらなんとかんさん」、「中南米だったらあそこの人」のようなまちづくりができてくると、僕はまだまだ豊かになるのじゃないかなと思います。



外国人にとって住みやすいまちづくり

この間も、ラシナとスーパーに2人で入っていったら、入口を通り過ぎた小学生の女の子が、ラシナを見て「うわあ」と言ってびっくりしていたのです。あれは「あっ、ラシナだ」ではなかったね。「うわあ、なんかアフリカ人がおる」と目が大きくなってた。僕は今46歳なのですが、僕も小学校のときに、高知市内の帯屋町で黒人を初めてみたときに、もう怖くて逃げたのを覚えているのです。この35年ぐらいの間に、「高知県そんなに変わってないなあ」という感覚です。そんなに黒人と会うことがなかった自分たちの時代とあまり変わっていないようです。

今、黒人と会うことも高知の人はないかもしれない。しかし、東京はいっぱいいるし、大阪もかなり増えている。アジア系の人たちも急激に増えている。高知県では、まだアフリカ人に会っただけで「こんなにびっくりするのか」、「まだ、そんな地域なんだな」というのを最近も感じます。

そこで、僕たちは龍馬学園の日本語学科に来ている留学生、ネパールの人たちも、インドからも来てくれている。中国、インドネシア、フィリピン、チュニジアなどいろいろな国から来てくれている留学生をどんどん小学校や

中学校、高校の学校現場に連れていく活動を昨年から盛んにやっています。国際理解という意味で、自分の抵抗感をなくすということも、今のこの高知県にも必要な動きだなと思っています。

第一次産業をしている外国人の人たちを見たときに、最近高知県でベトナムの人などを見ることがあると思います。コンビニエンスストアでアルバイトしてるネパールの子は、ほとんどが龍馬学園だと思います。彼らに会ったときに、みんながどういう印象を受けるのかで、高知県が外国人にとって住みやすいかどうかが評価されているのですよ。

北古味：ちょっと悪口言われたな、俺ってことある？ 今まで。

ラシナ選手：悪口はあんまりないですけど、今でも電車に乗ったら誰も横に座ってこない。

北古味：みんながちょっと距離をおくんだ。座ってくれないんだ。でも逆に、今ずっと8年間住んでる佐川町のスーパー行ったら、レジに並んでたらお金払ってくれるおじさんがいるとか言ってましたね。

高知県と海外をつなぐ

この地域を、高知県を育てようと思ったら、絶対にこれから外国人の人たちが必要です。現状でも2018年の時点で外国人への依存度が高知県の漁業では全国2位なのです。外国人の人たちがいないと成り立たないと言われている。こういう現状の中で、今、僕もスポーツというコンテンツで、ある意味エンターテインメント性ももちながら、海外とのコネクションをつくることに携わっています。

旭駅の南の方にある龍馬学園に国際デザインビューティーカレッジ、日本語学科があります。この日本語学科に留学生にも来てもらいたい。今、留学生は5人ぐらいしかいないです。ずっ

全国 外国人依存度	
•全国	2009年 112人に1人 2018年 46人に1人
•東京	2009年 50人に1人 2018年 18人に1人
•高知	2009年 374人に1人 2018年 137人に1人
•1位	広島県 漁業 2018年 6人に1人
•2位	高知県 漁業 2018年 12人に1人

(出典：国土交通省「外国人労働者調査」)

龍馬学園

【学校紹介】



<p>高知情報ビジネス専門学校</p> <ul style="list-style-type: none"> システム工学科 情報システム学科 ゲームクリエイター学科 会計ビジネス学科 公務員学科 ホテルマネジメント・ブライダル学科 製菓衛生学科 調理師学科・調理学科 	<p>国際デザインビューティカレッジ</p> <ul style="list-style-type: none"> グラフィックデザイン学科 マンガ学科 建築インテリア学科 建築設計実習科 自動車整備工学科 美容総合学科 美容科（美容師）・総合研究科 日本語学科 	<p>龍馬看護福祉専門学校</p> <ul style="list-style-type: none"> 看護学科 医療事務・医療秘書学科 子ども未来学科 福祉保育学科
---	--	---

3校 22学科

人なんです。人が、現地の人が助けてくれる。

最初に思い描いていくビジネススキームは、ある程度の方向性は見えますが、結局それはスキームであって、人が作ったものです。しかし、僕たちのビジネスや人間関係というのは、人同士の情であったり、「なんとかこれはしたい」、「子どもたちのためにもやってあげたい」、「この人たちにこういうものを提供したい」という気持ちがあるから、そういう人が集まって一緒にできると思っています。

ビジネススキームというのは、あくまでもサンプルです。みなさんが何かをされるときには、やはり興味関心があることです。気持ちを持ってそういう仕事をするという熱意があれば、必ず誰かが助けてくれる。僕も今までもずっと助けられっぱなしです。

本当に「今月の支払いが200万円足りません」というとき、高知ファイティングドッグスは経営が今でも厳しいので、「今月200万、これないとほんまにヤバいわ」と思ったら、知り合いの社長に「ほんまに厳しいんです」と言ったら「じゃ、200万あげるわ」と言ってくれた。号泣ですよ。それを30代になっても、「この球団なくしたくない」と思いながら、必死になってやっている時代というのも、自分にもあります。

ぜひ20代のみなさんは、自分がやってみたいということを、前に進むということをやって、「形にならないな」と思っても、自分の熱意があれば協力してくれる人が絶対に出てきますから、それだけを信じてやってみてください。

国際交流が「まちづくり」の中にどのような効果が出てくるのだろうかといったことを、またみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

質疑応答

質問者：今の話では、ラシナさんがフランス語ができるから、国とまちづくりのために、何かしたいと言われましたが、何かプランなど考えていますか。

北古味：ラシナのフランス語を使ったプランですか。いや、今は何も考えていないですね。でも、僕は常に何か仕事の仕方っていうアンテナをいつもはっているんで、何かフランス語が必要な人たちが出てくるとか、アフリカをつなぐとか、フランス関係の方、例えば仕事で今度フランスへ行くとか言われたときには、ビビッときますので、やっぱりそういうつなぐというのが、スポーツチームの僕たちの、

仕事だと思っています。

何かそこに、先ほど僕が言った、このビジネススキームだったら、「こういうふうなプランだったら儲けるかもしれない」とか、「何かいいことがあるかもしれない」って言って、自分で自発的にやることも必要かもしれないですけど、僕がいつも大切にしているのは、そこには必ず人がいるので、誰かとパートナーシップを結んでやるということを今僕はやっています。誰かとやらないと、ちょっと寂しいですね、一人でやってもね。

でも、例えばラシナが15歳ぐらいから来て「ブルキナファソの野球人口を増やしたい」と言っていたので、企業であったりJICAさんと協力して、例えばブルキナファソに野球場を、野球ができるようなところ、ラシナとかは広場でやっているんですね。ブルキナファソは、石がゴロゴロあって、そういうところをきちっと、安全に野球ができるようなフィールドをつくったり、そこに日本語学校、日本語教育が提供できるようにしたり、もっといったら龍馬学園とか、いろんなスキルを習得ができる専門学校的なものがアフリカ側にもあるっていったことは理想かなとは思っています。

そこを高知県と結んで高知県に必要な人材、例えば経験を持つとか、資格を持つとか、そういう人たちをアフリカで育成しながら、高知県と結ぶということは、今後はできるかなと思っています。

きたこみ じゅん

(高知ファイティングドッグス球団株式会社副社長・
学校法人龍馬学園グローバルプロジェクト推進室室長)